

猿

ゆっくり霊沙

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

過去の反省を生かしての作品になります。

麻雀描写を無くすようにも努力します。

目次

プロローグ	1
プロローグ 2	3
プロローグ 3	6
プロローグ 4	9
1 1 猿	11
1 2 老人	14
1 3 樹海	17
1 4 原村和	20
2 1 高校生	23
3 1 全国	25
3 2 千里山	28
3 3 少しだけの状態で	31
炎	34
4 1 憧と夢	37
4 2 新麻雀部	40
4 3 姫松	43

プロローグ

「・・・またかよ!!クソ回線が!!」

このゲームの回線が落ちて怒る男こそ今回の主人公である。

「あ、携帯充電しなきゃ。」

唐突に携帯の充電器をベッドの上にしかれた4枚の毛布の中から探し出すとコンセントに差し込んだ。

「・・・充電になんないんだけど!!」

「・・・外真っ暗か。・・・コンビニまで行きたくないな、遠いし。・・・立ったついでだトイレに行こう。」

ドアを開く・・・

「よう。」

「・・・。」

目の前には老人がいた。

勿論男はその男を知らない。

「・・・殺○ぞ。」

「殺気高過ぎ!!いいか、よく聞けよ、お前はもう死んでるんだよ。お前が回線落ちだと思ったのはお前の頭の回線が破裂(クモ膜下出血)したからだよ。」

「泥棒ちやうの?」

「回り見ればわかると思うがな。」

周りは真っ暗で、家の中ではなかった。

「O・K。把握。あなたが神か。」

「私が神・・・ではなく、その下僕の下僕だ。君には転生してもらう。器的に何かに特化したの2つやるよ。次のお前の器はこれな。」

《高鴨穩乃》

「猿。」

「酷くね。その言い方。」

「いや、行動規準が。」

(あれ?何で俺はこの神の下僕の下僕を信じようとしてるんだ?)

「で、どうする?」

(俺・・・あんなハイテンションになることもあんまりないしな。・・・フレンドリーフアイヤした時にはテレビに向かって土下座するようになやつだぞ・・・回線落ちくらいで怒るはずなのに。・・・妙に馴れ馴れしくなってるのも気になる。・・・アカン、これ、精神いじられてる。・・・とりあえず気づけただけよしとしよう。)

「・・・世界をゲームのようなステータスを見れるようにしてくれ。細かければ細かいだけ良い。後は・・・麻雀の山を支配するやつ最初から制御させてくれ。」

「了解では来世はよい生活を。」

「ふう、野郎を書くのは辛いな。あいつは少しわかったみたいだが、俺の筆で書かれた文字の存在であることには気がつかないか。・・・悲しきかな。3次元のように見えてそこは2次元の・・・点と曲線だけの世界とはわからんか。・・・見ているのだろ？多数の3次元に住む住人達よ。お前らこそが神。私は下僕の神。・・・楽しい暇潰しに協力するからその次元に私もいかせておくれよ。」

「ダーう!! (なるほど、赤ちゃんからか。)」

「穏乃ちゃんアーン。」

「ダー。(となるとこれが母親か。離乳はしてるな。・・・キシリトールガムを噛んでから口移しとは・・・この母親凄いな。)」

キシリトールガムを噛んでから口移しをすると、子供が虫歯になる確率が6割り近く減る。

それを知っている高鴨母は子育てをさうとう頑張ってくれる良い母親であった。

プロローグ2

転生した私は始めに調子に乗ってしまった。

普通の子供より圧倒的に早く歩きだし、父親の書齋で本を絵本代わりに読破していった。

ステータスが現れると自分がどのように勉強すれば数値が上がるのか考えればどんどん能力的に上がっていったことも調子に乗っていたからだろう。

両親は天才が生まれたと喜び、どんどん英才教育を詰め込んでいった。

6歳の頃、ようやく原作キャラである新子憧と接触できた。

幼稚園を遠くの私立に送られてしまい、原作キャラと接触する機会が完全になくなっていったためである。

小学校も私立にいかされそうになったが、粘り強い交渉でそれを回避した。

・・・で、憧とは・・・友達にはなったが、原作のような親友ではなかった。

憧が私のことを不気味と言うのだ。

何が不気味なのかはわからない。

本能的に感じたのかもしれない。

阿知賀こども麻雀クラブができればそれも問題ないだろうと思いい、私は山に登るようになっていた。

麻雀の能力に直結するのと、単に健康面のことであった。
もちろん1人だが・・・。

阿知賀こども麻雀クラブをやめなければいけなくなった。

親が麻雀に偏見を持っていたからだ。

メジャーとなりつつある麻雀だが一部ではまだ偏見があるようだ。

私が転生したことで原作とは別の教育方針に変わってしまったの

だろう。

それでも行こうとしたら父親からひっぱたかれた。

これで赤土晴絵、松実玄と関係を持つことは不可能になってしまった。

いや、どちらもあり合いではあるが、絆とか大切な思いでとかはなくなってしまったのである。

和が転校してきた。

そして友達になろうとしたが、ダメだった。

和にも不気味で怖いと言われてしまった。

何が不気味なのか全くわからない。

中学は阿知賀女子中等部に進んだ。

阿知賀こども麻雀クラブは消滅したが・・・。

しかし、山の中で自分なりの生活スペースを作り、家ではなくそっちで多くの時間を過ごすようになった。

両親からは怒られるが基本無視である。

麻雀をやるのにはこうするしかなかったから。

自作の雀卓でルールブック片手に牌を並べて練習を繰り返した。

対人戦を経験することができたのが高校に上がって個人戦に出場してからである。

玄も出るが1こ上の学年でもあり、関わりもなかったのであんまり喋れなかった。

麻雀同好会に近いたため阿知賀のレジエントこと赤土晴絵もいないし、玄の姉の暖かい人こと松実宥もない本当のたまたま参加したみ

たいな感じであった。

対戦相手全てを飛ばした。

プロローグ3

平等に飛ばした。

山を支配しているのでとても簡単に試合が終わる。

それは完全に作業である。

玄やにわか先輩とも当たったが、ドラが無くても和了は可能であるため、その事を前提に打てば連荘で止まらなくなり飛ばせた。

大戦中私の顔になにかあるのかわからないけどギョツと眼を見開くのは止めてほしい。

正直怖い。

全国では失格になった。

原作キャラに会いたいと切なる願いがあつた・・・いないかなと集中力が切れてしまい、多牌をしてしまつてルール違反で敗北した。

東京見物をしたあと決勝を見ることなく奈良に帰った。

麻雀に対しての熱が冷めてしまい、一年時以降は麻雀カフェでたまに打つ以外はしなくなり、進学勉強にうちこんだ。

そーんで何事もなく京大の教育学部に合格。

京大、東大とかの頭の良いところは麻雀部は本当に強いが、私は登山サークルに入部してフツターの学生時代（エベレスト登頂2回を果す）を過ごした。

・・・んで、何をとちくるつたかわからないけど、自身がまだ原作キャラに会いたいという思いがあり、とあるプロ麻雀クラブの入団テストに参加した。

テスト費に1万取るのはボツタクリの感じがしたけど・・・。

「冷やかしなら帰れやあ。私たちはガチだからねえ。」

と私を冷やかしと決めつけて言ってくる20代後半の女性がいたのでガチで叩き潰した。

それを見ていたスカウトの人が合格を言い渡してきた。

『3順目・・・三重フリークス指名高鴨穂乃22歳。』

麻雀ドラフト会議で呼ばれた。

ニュースや新聞では経歴が経歴なので天才だのプロでは無理だ等散々なことを書かれた。

・・・三重原作キャラいない・・・。

プロでやること5年、原作キャラの数人とは対戦することができた。

私の勝率は8割り近く、蔵王大権現という物騒な渾名をつけられて頑張っている。

よく会うのがうるさい愛宕洋榎とその妹、フナQの3人だが、東京や長野の原作キャラには会えていない。

悲しい。

見えない天幕事件が私のプロ人生にトドメをさした。

高校時代は完全に潔癖だったプロ麻雀業界も時代が経過すれば膿がたまるということだ。

全盛期と呼ばれるくらい調子の良かった私はほぼ負け無しで過ごしていたので真っ先に疑われた。

庇ってくれるような親友もおらず、グレー扱いで、麻雀業界の人柱

とされてしまった。

チームからは年俸の1割りを毎年口座に振り込むことを約束してくれたので生活には困らないが・・・関西麻雀業界はすさまじい打撃を受け、京大麻雀部に強制捜査が入るくらいだった。

「35歳・・・ひっそりどこかに行って第2の人生を歩もうか。」

プロローグ4

「富士さん、こっちの席お願いするよ。」

「はいはい、まったく、こんな婆さん相手にして面白いかね？」

「富士さんとやるんと数日運氣が上昇するんや。この前の試合の後にも契約取れたんや。」

「俺もそれ思った!!」

千葉県成田市の成田参道近くにある料理店の店員として働いていた。

麻雀は見えない天幕事件で一時関西リーグが壊滅的打撃を受けたものの、元老とも呼ばれるほど様々な分野で影響力を持った小鍛治元プロが事態収縮の為に動き回り、なんとかおさめることができた。

それから35年・・・70となった今は高橋富士と名前を変えていた。

仕事とは別に小中学生向けの麻雀教室を開いていた。

それは阿知賀こども麻雀教室の憧れでもあり、未練からでもあった。

「婆さん生きてる〜？」

「成田んとこのガキじゃねえか？今年インターハイ行けそうか？」

「おじさん達仕事は？」

「有給消化だ。こいつらもだとよ。」

「んー。まあ富士さんもいるし、今年はギリギリかもなー。成南や幕張総合、八千代正院もあるし・・・。」

「成南は名門だしな。残り2つは人海戦術か？」

「2校とも麻雀部員数500人とか・・・全国でもないくらい人が集中してるからな。」

「まあ成田にかつてもらいたいねー。死ぬ前に優勝見せてよ。」

「頑張る〜。富士さん、死ぬなんて言わないでよ。2000まで生きるって言ったじゃんか。」

「いや、歳には勝てんかつ!？」

ボタン

「「富士さん!!」」

「ん？」

「よう、70年と5ヶ月ぶりか。」

「ああ、神様か。」

「どうだった？人生は？」

「浮き沈み激しい人生だったよ。」

「今、高嶋は植物人間状態だ。その時に起こった出来事を簡単に話すぞ。倒れた後成田がインターハイにて4位になった。その10日後に見えない天幕事件の高嶋穩乃がスケープゴートであることが発覚し、名誉を回復。数日間高嶋穩乃の特番が組まれ、麻雀業界では英雄となる。」

「それは結構なこと・・・麻雀ね。プロ、アマ・・・潜伏中の海外でも少しやったけど飽きなかったね。最後はさ。」

「英雄は死ねない。高嶋穩乃・・・君は歴史に居なくてはいけない存在となった。・・・2週目。君にはもう一度生きなければならぬ。さあ、楽しんできなよ3週目を!!」

「ババアに期待はしないことだよ。」

「大丈夫さ。英雄となる器は元から合ったんだ。」

「さようなら。神。」

「さようなら君。」

高嶋穩乃5歳・・・山の中で記憶を取り戻す。

「前のようにステータスも見れない、山も完全には操れないけど・・・弱くてニューゲーム。アルプスの山々のような頂きにたとうじやないか。」

1-1 猿

体は幼女、心はババアの高鴨穩乃・・・前世の反省から麻雀の熱を忘れないように努力した。

それは家族にも影響を与えていくこととなる。

「あこくおっはよう!!」

「シズ、おはよう。」

実年齢6+70+18の94歳老人を見ている神はBBA無茶すんなと言う突っ込みがくるだろうなと穩乃は思うが、前世はずっと真顔で笑顔を見せなかったから怖いだの不気味だの言われたのではないかと大人になってから気がついた。

・・・まあ小学校の時期が人生の中で一番楽しい時期だと思う。

バスに乗り込み憧と喋っていると玄と宥が乗り込んできた。

(バス使っててよかった・・・前世はバスを使わなかったから接触することがなかったんだ。)

といっても挨拶をするくらいだが・・・。

学校では活発に動き、ハキハキと喋るからすぐに人気者となった。

そんな子供達を誘って私が麻雀を教えた。

「シズは教えるの上手いね。先生よりも上手いんじゃない?」

「ないない。でもあこ覚えるの速いよね。流石天才あこ!!ちやつかり九九やわり算も予習してるだけないね!!」

「シズ知ってたの!!」

「たまに九九口ずさんでいたじゃん。」

「もう、シズ内緒にしてよね。」

「りよ〜かい!!」

「絶対わかってない。まて〜。」

「こっちだよ!!」

楽しい時間程早く進む

ピーピーカチカチ

「あちやー、久しぶりに損した。今日は合計+1500ドルかあ。」

ドル麻雀、円ドル為替、株、バイナリーオプション・・・前世ではできなかったことが普通にできていた。

もちろん親には内緒だけど。

お年玉を貯めたいと言って作った口座がこんなことになってるとは親も思うまい。

というか前世からそうだが両親共に機械音痴の感じがある。

だからランドセルを改造して側面に組み込んだパソコンを気がつかない。

「老人となると暇だから色々できる時間があるからね・・・無駄に裁縫が上手くなったり、色々な料理を作ったり・・・ダメだ。小学生らしくない。」

イメージはこち亀のハイテクランドセルであるがあそこまではしていない。

していたらドン引きされるのがわかっているからだ。

パソコンだけでなく山にも毎日登る。

空気が澄んでいるし、体も強くなる。

何より今の麻雀の能力が山が深ければ深いほど支配することであるが、何かが掴めそうなのである。

既にエベレスト山脈の14座を攻略していたため経験はある。

難度死ぬかと思ったが本能以で登りきった。

8000メートル・・・デスゾーン。

2つ目の能力を与えてくれた。
3つ目。
それをこの人生で求めた。

1—2 老人

有名な登山家は強靱な肉体と精神があり、なおかつ神に愛されれば山はその人物に歓喜を与えたと言った。

神・・・それは不思議な存在で普通ではない存在。

どこかで君を見ているかもしれない。

「君の横で・・・なあ高鴨穩乃。」

「は!?!・・・夢・・・か。」

高鴨穩乃は小学3年になっていた。

阿知賀こども麻雀クラブに入ることができた。

松実玄、新子憧、それに赤土晴絵と共に麻雀を打っていた。

前世では果たせなかった夢が現実のものとなった。

「玄さん、それロン!!」

「えええ。」

「玄さんドラ切らないと牌まるわかりだよ。」

「穩乃ちゃん・・・でもでも、切ったらドラを大切にできないじゃん。」

「そうだけどさ・・・。」

「確かにしずの言いたいこともわかるけど、玄の気持ちも大切にしないよ。」

「赤土先生・・・。」

「しず、玄、赤土先生、もう一回やろうよ。ね。」

「うん!!」

「そうだね。憧ちゃんナイス。」

阿知賀こども麻雀クラブ・・・私の影響で麻雀を知った子供達は家に近い大きな麻雀クラブに行つてしまった。

やはり高校にあるこども麻雀クラブに入るのには小学生は抵抗があるかもしれない。

なので、この時期は基本4人で毎日打っている。

・・・いや、5人か。

私達の雀卓の後ろにあるストーブで暖まる小学5年生の松実宥と宥姉がそこにいた。

行く勇気が無かったらしい。

それを私や憧、玄さんが誘って連れていったら来るようになった。

また、この特殊能力持ちの2人をどの様に改造すれば2流のプロまでなら通用するか必死に考え、玄にはドラを他家に渡すというのを考えていた。

「渡す？ドラを？」

「そう。ドラを。捨てるのが無理なら他家に山から引く前に渡しちやえばいいんじゃないかな？そうすれば相手の牌のほとんどがわかるよ。」

「でもー。」

「宥さん、あこ手伝って。」

「玄ちゃん頑張ろ。」

「玄、頑張ろ!!」

「・・・うん。やってみる!!」

「じゃあやろう!!」

その光景を見て赤土晴絵は小学生にしては穏乃が相手をやる気にさせるような持ち上げるのが上手いと思った。

(ただ、しずはどこかプロみたいに絶対に自分の芯を見せてくれないんだよね。まるでベテランみたいにあらゆる場面で対応するし。)

赤土晴絵もまた一流のプロになり得る素質は既に持ち合わせていた。

そうでなければ穏乃のベテランの様な打ち筋はわからないだろう。

「ねえしず、しずって宿題の将来の夢って何にしたの？」

「え？あこどうしたの？」

「んー気になっただけ。」

「エベレストに登りたいな。」

「しずらしね。」

1—3 樹海

5年生でサマースクールという夏休みに遠くに行く企画があった。行き先は京都であり、帰りには千光寺ハイキングも予定されていた。

私はせっかくなので行くことにした。

麻雀クラブの皆（低学年もボチボチ）にも行って来ると伝えると行ってらっしゃいと言われた。

それから数日

バスが横転し、身体を投げ飛ばされて千光寺近くの樹海の中にいた。

数日間気絶していたため空腹である。

幸い怪我はかすり傷位なので起き上がる、歩くのに問題はなかった。

リュックサックに入っていた金平糖を舐めながらどうするかを考える。

「高いところに行こう。」

本来なら動かないのが正解だが、山に行った方が安全と感じた。

山に登る、そして高い木に登る。

事故の現場が遠くに見えた。

いや、事故のあったと思われる場所に喪服の団体がいるのだ。

「あちやう。行きづらいな・・・でもお腹も減ったし、よつと。」

全力でその場所に走る。

「伊達にエレファント14座を制覇してないよ!!」

前世で非公式ながら14座を制覇していた高鴨は樹海の道をスイスイ進み、僅か12分で現場に戻ってきた。

穩乃の乗っていたバスが横転して燃えている映像をニュースで見た。

玄や宥姉に電話すると宥姉が泣いて凄いことになったが、穩乃の家にとりあえず行つた。

穩乃の両親はニュースよりも早くから連絡があつたらしく真っ青な顔でうつ向いていた。

「嘘……。」

やっと現実だと意識した。

喪服を着てバスの事故現場に行つた。

バスに乗っていた人は焼死か投げ出された人も体を強く打つて重症らしい。

ただ、穩乃だけが見つからなかった。

生きていて欲しいと願いながら私はとりあえず花束を置こうとした。

ガシ

「ヒッ!」

痩せた細い腕がガードレールの下から伸びていた。

「よつと。」

登つてきたのは穩乃だった。

皆から泣きつかれた。

ここではやめて欲しい。他の喪服を着た人から涙を流しながら睨まれている。

「こゝ、こゝこではやめようよ。ね。」

「しず、しずううう!!」

「うわあああん!!」

「良かった。本当に。」

(頼むからやめて!!TV局の人も撮るな!!遺族?がいるんだから!!)

《千光寺バス横転 奇跡の生存者》

新聞に大々的に載っているのを見て本当に軽く鬱になった。

夏休みが終わるまで阿知賀こども麻雀クラブに入り浸り、ずっと麻雀を打ち続けた。

(しず!?!何かに目覚めた!?!白があなたに吸い寄せられているみたいだよ!!)

超本気状態で打ち続けている穂乃は常時デスゾーンを発動していた。

しかし意識してないので能力の一部だけだが。

1—4 原村和

「のーどか!!こっちこっち!!」

「早く早く!!」

「待っててください!!」

「これが都会のモヤシっ子ってやつか。」

「二人が早すぎるんですよ!!こどもですか!!」

「こどもだよ!!」

和と友達になった日、私達は次のステップに立った。
小学6年の春のことである。

「ほほう、これはこれは見事なおもち」

コン

「ごおら。」

玄のおもち発言は平常であり、それを止める赤土先生のツツコミま
での流れはいつも通りである。

宥さんは後ろであわあわしているのもいつも通り。

皆に受け入れられた和は早速麻雀を打つ。

「ドラ8・・・そんなオカルトありません!!」

SOA炸裂であるが、ドラは玄に集まる。

徐々にだが他家に意図的にドラが集まるようにもなっていた
が……。

こればかりは本質だと私は思う。

「暖かい牌がいっぱい!!」

まあ宥さんの能力も凄いことになってるけど……。

私は普通の麻雀を、憧は和程では無いけどデジタルで打つ。

負けたり勝ったりを繰り返して、そして月日は流れていく……。

「あこは中学は別か。」

「ごめん。」

「謝ることはないです!!」

「そうだよ。赤土先生がいなくなってから阿知賀子ども麻雀クラブは無くなっちゃったし、麻雀を上手くなりたならそっちの方が良いよ。」

「皆……。」

「頑張れあこ。」

中学に進学にあたり、あこだけ別の中学校に行く。それまでに私も上手くならないとね。

ゲホゲホ

「本当にね。」

小学6年の秋ごろから喀血が出るようになった。病院に行っただけで原因不明だった。

私はそれが何等かのリミットだと思う。

神が与えてくれた3回目は短命だと示しているのかもしれない。

中学校に行ってからも体に異変が起きる。

黒板がぼんやりと見えるようになったり、若白髪が出てきたり……まるで老化がこの歳で始まったかのように……

「まづいまづい。本当にまづい!!」

慌てた私は症状を遅らせるために長期的な休養生活をするようになった。

学校には行くが、帰ってすぐに温泉に行ったり、整体に通ったり、休みの日はすぐに寝る等のかく疲れを溜めない生活を送った。

そのせいか中2になる直前には喀血の回数も減り、少しだけ回復の兆しが見えてきた。

ただ、この年に和が転校していくという悲しい出来事もあったが……。

『全国中学麻雀選手権個人戦優勝は原村和!!』

ここから阿知賀の麻雀が再び始まっていく。

(・・・恐らく後3年持つか持たぬか・・・なら、私は最高の麻雀をしよう。)

寿命を引き換えとした命の麻雀が高鴨穩乃の中で始まる。

2—1 高校生

和の優勝を見て私、憧、玄、宥さんは思いでの場所に集まった。
そこで阿知賀で麻雀部を起こす。

「しず……老けた？」

「あこでもそれは怒るよ!!」

「あはは、ごめんごめん。」

いつもと同じように麻雀を……。

春……私は高校生になった。

そして眼鏡をかけるようになった。

「老眼鏡……か。もう歳ってことだね。」

嫌だなあ〜と思いつつもそれを出すことはしなかった。

「部活動をするにはあと一人足りないかー、集めよう!!」

それも玄が同級生の鷺森灼さんを連れてきてくれてとりあえず5人……部として認められる最低限をクリアした。

「私も連れてってくれないかな……インターハイ!!」

さらにその事を知った赤土晴絵先生が故郷に戻ってきたと同時に私達の顧問になってくれることとなった。

「行こう!!全国へ!!……和と全国の舞台であそぶんだ!!」

14座……私が中学の限りある時間で見つけた3つ目の能力。

代償は1つの能力をつかうごとに寿命が縮むことである。

いわゆる余命を代価にする能力。

(魂の削れた今の私にピッタリの能力だね。……見つけるために1座を消費したのは厳しいけど。)

1座毎に能力も変わっている。

13座を背負って私は進む。

インターハイ前のもう特訓。

指に血豆ができるほど打ち込んだ。

能力はもちろん使っていない。

玄の能力はこの特訓期間に完全になり、戦術の幅が広がった。

小走やえにコンビニで出くわし、指について馬鹿にされたが気にすることはなかった。

(県予選・・・予行演習といきましょう。私は残りの火が消える前に!!)

奈良県・・・超新星現れる。

玄はドラ7で小走やえを封じ込み、晩成高校の出鼻を挫く。

宥さんは無難な打ちで得点を伸ばし、憧も1位を維持する。

灼さんも点を守りきった。

ここまではダークホースが現れた、晩成王者の転落等と書こうと記者はメモを取っていく。

が、書き直さなくてはならなくなった。

「一通、混一色、役牌4000オール。」

同席者達は穩乃の姿が蔵王大権現のように見えたらしい。

背後の13の炎が円を描きながら彼女の周りを回りだし、さらに背後には富士山が映る。

晩成の異能持ちの少女は

「場が完全に支配された。牌が全て透けだし、自身の指が異常に重くなる。まるで石だった。」

心が折れるではない。

服従か死かの2択を迫られた気分とも答えた。

《女帝宮永照を破れる可能性大!!10年越しのリベンジ阿知賀の高鴨穩乃、恩師の無念を晴らすため全国へ!!》

3—1 全国

県大会予選、圧倒的な実力差で奈良県は10年ぶりに阿知賀女子が全国の切符を掴んだ。

地元住民が喜びの声を上げるなか、私こと穩乃は大学病院に行っていた。

「なんでここまで放置していた!!」

膠芽腫・・・脳にできる癌の一種で発見できて様々な延命治療をおこなっても余命は2年いくかいかないかである。

しかし私は放置したため余命は2ヶ月と言われた。

両親や仲間達には絶対に話さないと決め、私は病院を後にする。

「手術はしない。NOだ!!」

合宿・・・長野県にいる和と対戦した高校の生徒達と麻雀をした。

「リーチだし!!」

「ロンですわ!!」

「ツモっす。」

皆は卓でやっている。

私はその後ろから見ている。

小さな子供・・・衣がやって来て私に向かってこう言った。

「大丈夫なのか? 神が去ろうとしているぞ。」

神が去る・・・神去る。

昔の言葉で死ぬということ。

「大丈夫、なんなら打つ?」

「うむ。それなら良いのだが。」

衣と池田、桃子と卓を囲む。

「む、山が深い。」

「ポイントゲッターカナちゃんには関係ないし!!」

(リーチっす。)

顎に手を当てる。

それから胸元で両手を結ぶ。

その姿はジョジョに出てくるディオの椅子に座るシーンのようである。

「赤土晴絵さんから行儀が悪いと言われるけれども、私にはこの姿勢が楽なのよねえ。」

口調が変わる。

それは老人のような弱々しいものだった。

キチ

眼鏡を上げ、髪をほどく。

「さあ、来なさい。」

「なんだし、あれ。」

池田は今まで異能を知らなかった。

しかし、それを見れるようになった。

今、高嶋の姿が老婆のようになり、衣の背中から出ている腕を抑えている。

「ノーテン。」

「テンパイ。」

衣が海底で上がらなかった。

老婆を衣が下から見上げる。

椅子に座った老婆は足を組む。

「若いのにへこたれなさんな、この富士は逃げも隠れもせん。」

全国1回戦・・・大将戦、解説していた三尋木プロ・・・いや、プ

口達は高嶋の打ち方を見てこう発言した。

「あれは高校生ではない打ち方だね。」

「そうだね☆完成度☆能力供に小鍛治プロに匹敵するよね☆」

「10年前の私に確かに似てるけど、私は殆ど運だったから・・・。」
「nono、小鍛冶プロは運だけじゃnothing。確かな技術を備えています。」

「今回のダークホースはここだね。さて、もらってる分の仕事をするかねえ。」

「えく、三尋木プロ、もう一杯いこうよ☆」

「はいはい、解散、解散。」

「えー☆・・・これ。」

「カルテ？」

「情報は強いだよ。私。」

3—2 千里山

コボゴボ・・・

「またか・・・血が出たか・・・。」

ホテルの洗面所で私は血を含んだ咳、痰を出していた。

体が痙攣することもしばしば起こるようになり、辛い状態が続いていた。

2回戦の朝のことである。

5種類の薬を飲み込んで一時凌ぎだが痛みを和らげると私は2度寝しようとしてベットに入ってしまった。

(しず?)

異様な音の咳に驚いた私こと憧は洗面所に行くしずをベットの中から見ていた。

また咳をした後、しずが洗面所から戻ると眠ってしまったので私は洗面所に行ってみた。

(え?)

流し忘れたのか結構な量の血が付着していた。

「しず・・・!!」

「見たな。」

寝たと思ったしずは私の後ろから真っ青な顔でこちらを見ていた。

流し忘れたのか・・・私らしくない。

「しず!!大丈夫なの!?!」

「憧、みんなが起きちゃう。こっちに来て。」

私はみんながいる部屋から憧を廊下に連れ出した・・・。

廊下は空調が効いていてとても過ごしやすい。

自販の前にある椅子に座り、憧の質問に答えていく。

「しず、体調悪いの？・・・あんな咳や血が出てたから悪いとは思うけど。」

「悪いよ。この上なくね。」

「いつから？」

「3年ぐらい前から。」

「3年!？」

「・・・憧ならいいか。手を握ってくれない。」

「手を？」

13座のうち9座を彼女に流し込む。

命渡し・・・エベレストの能力・・・奇跡の生還伝説からの能力である。

「あ、あ!？」

「我が半生・・・託したよ。憧さん。」

流れ込む・・・しずの記憶・・・

国外逃走、絶望、諦め、冤罪、認められない成果、衰える体、僅かな希望、楽しかった日々、数少ない仲間・・・前世と今世が混じる。

その濁流のごとく記憶を憧はその天才的な頭脳で吸収していく。

全てを理解したとき・・・憧は目の前にいる老けたしずに対してなにも言わなかった。

いや、言えない。

苦労の言葉では足りない前世を知り、安定を求めた今世は魂の限界である。

憧の瞳には強い思いが宿る。

その思いは彼女に8に関わる異能を与えることとなる。

「思わずは、若き我が身、朽ちの時、少し残るは、未来の色。」

2回戦、千里山の園城寺怜が未来視を使って玄を苦しめる。
宥さんも巻き返しを頑張るが上手くいかない。

憧は能力に振り回され沈黙。

灼さんが必死に稼いでなんとか3位。

そして私の出番。

「行ってくる。」

「がんばって。」

「・・・負けないで。」

「頑張れしずちゃん!!」

「頑張れ穩乃ちゃん!!」

「ファイト!!」

「楽しんできな、穩乃!!」

「はい!!」

ゴボ。

ハアハア。

「・・・。」

タツタツタ

血の塊が廊下にごびりつく。

3—3 少しだけの状態で

フナQが言とったな。

「清水谷部長、阿知賀の大将は気をつけとんでください。」

「そうなん？ 浩子が言うから正確だと思うが。」

「老眼鏡を持ち上げる動作の後に彼女はスイッチが入るようです。能力についてはわからなので部長の能力でさりげなく探ってほしいんです。」

「ええよ。ただ2位と35000点差あるで。3位の阿知賀より……。」

「ええんです。阿知賀は大将が異常なんです。」

下座に座る阿知賀の大将……怜みたいな未来視が有るんか？

それとも普通に異能なんか？

んーわらんや。

「よろしゅうな!!」

「よろしくお願いします。」

「よろしく。」

阿知賀の大将の挨拶の番やで

「……」

!?

髪の色がどんどん白くなってる!?

脱色か……今になって憧に命を渡した弊害が出てきたか。

まあこれから老婆のように老けていくと思うけど、それは人生の完結に相応しい姿かもしれないねえ。

ティヒヒ……

「ティヒヒ．．．うん。私には似合わないね。．．．さあ、若者よ。麻雀をしよう。」

前半終了時、穩乃の動きは実に美しく、そして見本のような打ち方であった。

「それは危険牌。切るなら三元牌もしくはソウズの若い数だね。ロン3900。」

教育者の打ち方であった。

((牌を把握している!?!))

それは対戦している3人からしたら手牌がバレバレということであり、テレビ等で見ている人は解説要らずの発言に感心していた。

大会をリアルタイム、しかも同時解説麻雀なんてやる人はいない。プロなら暗黙の了解で相手の核心となる技術や異能には絶対に触れないが、彼女はそのストレスを絶妙に指摘していく。
相手にしかわからないように。

あかん、あかんわ．．．。

これはみんなに感謝やな。

1位の差があったから準決勝は行けるけど、この差がなくなれば破談．．．。

怜を無理させる訳にはいかない．．．みんなの負担を増やすわけにも．．．
部長の私がしつかりしないと．．．。

「よし!!無極点竜華や!!」

「ええ、これで勝ちが決まりでしょう。」

「・・・フナQ、なんか言ったか?」

「ええ、監督。阿知賀の大将の情報を集めてほしいと。」

「適任やな。」

「竜華?」

「ん?どないしたん怜?」

「いや、あれ・・・汗?」

「「え?」」

なんなんや・・・こいつ。

体温34.5、心拍数46、酸素吸収比率98%

人間なん?

低体温・・・なのにこの比率・・・フナQに報告やな。

中を見られたか・・・千里山ね。

清水谷竜華マーク

体調は山登りのような感じ・・・ハイテンションでもない・・・

「勝った。」

穩乃突如勝利宣言。

炎

「勝った。」

勝利宣言はテレビに拾われ、全国に流れる。

ネットは燃え上がり、ニュースになるのは容易い。

そんな中、真っ白の髪になった穂乃は椅子に深く座り込む

「山は私の支配下だ。もう負けることはない。」

その言葉通り手牌は次々に役の形になっていく。

オーラスになった頃には勝敗は決した。

穂乃は絶対安全圏内に入った。

ぼろ負けしていた立場から大逆転であるが、周りはそうは思わな
い。

勝つべきして勝った。

運命で決定していたかのような起こり得るべきして起こった出来
事のように感じた。

「ありがとうございます。」

私は立とうと足に力を入れるが立てない。

見かねた千里山の大将が肩を貸してくれたが、立った時に見えた自
分の足は、前世で凍傷になりそうだった時に酷似していた。

「ただいま。」

「穂乃!! 大丈夫!!」

「穂乃ちゃん!!」

「シズ!!」

皆が駆け寄ってくる。

大丈夫と言って、私は疲れたと呟いて寝てしまった。

「やあ。久しぶり高鴨穩乃。」

「久しぶり、神様。」

「そろそろ体も限界だ。どうする？このまま眠っても良いのだよ。」

「・・・いや、私はまだ皆のために戦う。」

「まだ戦うか・・・。なら賭けになる。君に残されたのは時間はピツタリー時間。明日の準決勝で使うかい？それとも決勝？」

「私は・・・」

「なるほど。君らしい答えだ。・・・頑張つてきな。最後の時間を。」

穩乃は起きない。

昨日の昼から起きない。

今日の朝、いくら私達が揺すつても起きない。

赤土先生が今穩乃を病院に連れていった。

私達は穩乃が抜けた状態で準決勝に挑まなくてはならなくなった。

相手は千里山、白糸台、新道寺・・・強豪校に勝たなくてはなら
ない。

「諦めない。諦めないよ!!」

私・・・新子憧は穩乃から受け取った気持ちと能力で戦いに行く。

「ドラドラドラ。爆発よりも流さないよ。今は勝つことだけだよ!!」

「冷たくてもいい。勝つんだ。皆のために!!」

「晴ちゃんの目指した舞台、私達の思いを繋がないよ。」

『僕は神様だけど・・・運命に干渉することはできない。・・・穩乃、残念だけど君は終わりだ。』

最後の力を振り絞って起き上がる。

私は周りを見渡すと泣いている皆を見つけた。

ボヤけて見えづらい視界と難聴になった耳は声をよく拾うことはできない。

だけど・・・私は察した。

ああ、負けてしまったのだ。

と・・・。

今の私でも淡、メリー、咲の3人を飛ばすことは出来る。

だけど私は全力を出せぬまま魂が壊れてしまう。

ああ、残念だ。

ととてもとても残念だ。

「ありがとう。」

4—1 憧と夢

憧は穩乃が火葬されているのを大泣きしながら別れを告げた。
仲間の皆も泣いている。

阿知賀こども麻雀クラブの面々も穩乃の急死に涙を流した。
火葬までの間・・・とても大変だった。

赤土先生はマスコミから生徒の変化にも気がつかないのかと散々叩かれ、私達も周りからはそう言われた。

穩乃のおばさんにも言われたときはショックだった。

「・・・暖かくない。穩乃ちゃんの席が冷たいよ。」
「うん。」

学校が始まり、宥姉は穩乃の死をまだ受け入れられてない。
灼さんは穩乃の死で完全に麻雀と決別してしまつて麻雀を辞めてしまった。

「玄は辞めないよね。麻雀。」
「う、うん・・・。」

齒切れが悪い返事しか帰つてこない。
もう楽しく麻雀を打つことは不可能となった。

・・・だからこそ、憧は穩乃の楽しく皆で麻雀をしたいという願いに涙を流しながら

「皆の気持ちバラバラになつちやつたよ。穩乃・・・。」
墓の前で穩乃に語りかけるしか、残された者はできない。

パク

「憧・・・。」
「なに？」

「あんた大丈夫なのそんなに塩分取つて大丈夫なの？梅干しやらたく

あんやら漬け物とか……。」

「大丈夫、大丈夫……ただ今は食べさせて。」

憧はストレスから塩分の多めの食事を間食に、穩乃の記憶が増えたことで頭を使うため甘い物も多量に摂取するようになる。

「憧、憧。」

「……穩乃？」

「私は穩乃の記憶の残骸。残りカス。」

「でも穩乃は穩乃だよ!!」

「……時間だ。憧、頑張つて。」

「え？何を？穩乃？え、行かないで!!穩乃!!」

ガチャン

牢屋のような部屋に閉じ込められる。

「フウー、憧サン、こんにちは。さあ麻雀をしましょう。」

ロシア系の白人美女と黒服が雀卓を囲む。

私も知らないうちに座っていた。

「はあ……はあ。」

「13時間でワタシに勝ちますか。やりますね。」

「次は私かな？」

黒服から煙が上がる

「小鍛治プロ!?!」

「これは穩乃ちゃんの記憶。私と対戦した7戦の打ち筋から予想される幻影。卓に着きなよ。」

「24時間経過・・・今日はここまでだね。じゃあまた明日。」

ガバ

「・・・夢？」

凄まじい疲労と枕元にあるチョコレートのカバー、梅干しの種、水が少し残ったコップを見ると私はこれらが無意識に食べていたらしい。

「・・・おかしくなっちゃったんだ。私の体・・・。」

赤土先生は私達を見捨てなかった。

自身のプロ復帰を完全に断り、高校側と交渉の末、麻雀部の顧問を続けてくれることとなった。

また、土日の学校が無い日は他校との練習試合を多く組んでくれるようになった。

新しい麻雀部はここから始まった。

4—2 新麻雀部

4人だけ……いや、宥姉もそろそろ引退するので、実質3人になる麻雀部はとても寂しかった。

「ほら、元気出して!!」

赤土先生は精神が安定しない玄を励まし、私には実力が伸びるように、前よりも厳しく指導してくれた。

ただ、毎晩出てくる小鍛治プロに比べると物足りない感じもする。

「……トイトイ。」

「宥がいたら寒いって言うね。」

赤字無しのドラも無し。

2ハン役のみの低い点数だった。

「最近大丈夫なの？顔色悪いよ。」

「大丈夫です。赤土先生、今週の土曜日はやっぱり私だけですか？」

「玄がどうしても行きたくないって言うからね。姫松に乗り込むよ!!」

「がんばります。」

「お、来たね。」

「今晚もですか……。」

「いや、今晚は別の人だよ。……私も怖いから近づきたくないんだよね。」

「憧!!ファイト!!」

「小鍛治プロが怖い？穩乃!!説明してよ!!」

「まあ顔を見れば頭の良い憧ならわかると思うよ!!」

ゴゴゴゴゴゴ

私の背後から凄まじい圧力を感じる。

いくら夢だからといって現実にも支障をきたしているのでも、もし夢の中で死ぬようなことが有れば、現実でも死ぬ可能性がある。

「凄く振り向くのが怖いんだけど!!」

ゴゴゴゴゴ

「後ろを向け。」

老人の声……でも振り向かない。

振り向いたら何がおこるかわからない。

「……それがダメなのだ。」

パン

目の前にいた小鍛治プロと穩乃がガラスのように景色と一緒に割れる。

「ほう。それでも振り向かぬか。」

カツンカツン

「私自ら顔を見せる手間をかけさせるとは、小娘、それはある意味で才能だな。」

今のロシア大統領のウラジル・プレーが立っていた。

「これはあくまで私の夢、起きれば日常に戻る。」

「果してそうかな？夢は夢でも精神が壊れれば植物人間となり起きないことも有り得るぞ。」

「プレーも穩乃から引き継いだ、記憶の断片なら穩乃はあなたに直接会い、そして生き延びている。穩乃にできるのなら私にもできる!!」

「……なるほど。」

パチパチ

「良く言った。だが、世の中そこまで甘くはない。穩乃、戻ってこい。」

「まだ見たかったんだけどなく。」

「穩乃!!試したの!!」

「ここで起こることは、全て憧の力になる。今回はテストみたいなものだし、精神のトレーニングでもある。憧は偉いよ。私は同じことをされて振り向いた。今の彼より年老いていたけど、威圧に屈して失望されたよ。所詮プロの一流にはなれないような人はこれぐらいの才能

しかない。けど憧は可能性を見せた。たぶん今の憧なら全国で暴れられる。現実でも体感してみなよ。」

ここで夢は終わる。

ベッドは汗でグツシヨリ濡れていた。

4—3 姫松

姫松高校・・・今年の夏はシードでは無かったものの、準決勝に進んだ強豪であり、伝統ある高校だ。

「憧、今回は姫松と千里山の合同練習に混ぜてもらおう形だから失礼の無いようにね。・・・まあ、憧に限ってないか。」

「糧にしていけます。」

「その調子だよ。さあ、頑張つて!!」

「今日はよろしくお願いします!!」

「よろしく!!・・・えっと、新部長の愛宕絹恵です。」

「千里山の新部長の船久保浩子や。フナQでええよ。」

「阿知賀女子の新人憧です。今日はよろしくお願いします!!」

「固い固い、噂は聞いてるからゆっくりやろうや。まあ、うちらも会場借りてる側だから偉そうに言えんけど。」

「あかん、フナQ、こういう時どうすれば良いかわからん!!」

「ハァー、ちーさい頃から見てたがこれ治って無かったんかい!!シヤキツといけや!!」

「仲良くやってるね。」

「赤阪さんも強かやな。フナQ使つてうちの子の精神的に成長させるとか。」

「いや、愛宕さんあなたも何か企んでますよね。」

「せやな。みんな何かしら企んでる、でもそれwin-winの関係やろ。それならいいやんか。」

「赤阪さん珍しく良いこと言うやんか。何か起こるで。」

「ややな。そんちやいますよ。」

「コントは一旦置いていて、赤土さん、阿知賀女子は大丈夫なんか？ エースの子が病死して、部長も辞めたらしいやんか。3年の子は引退だし、ドラいっぱい来る子は今日来とらんし。」

「ドラの子の玄は精神的に来てまして・・・来年までに立ち直れば良いかなぐらい深刻で・・・今麻雀できるのが今来ている憧だけなんですよ。」

「副将の子やろ、何かインパクトに欠けてる記憶が有るんやがどうなん？」

「エースだった穩乃の死で覚醒しましたね。正直本気でやらないんでどれぐらい強いかわからないんですけど。」

「へえ、ええやん。漫の起爆剤にならんかな？」

「ちと見てみる？」

「ええよ。」

(なんなん・・・導火線ごと濡らされたんやけど・・・絶対に起爆しないパターンや。)

「阿知賀の憧だっけ？私に何したん？」

「見て可能性を摘み取った。」

「可能性？」

「その道筋上に無数に存在する可能性のうち1つを選ぶ。まあ、凄まじく頭使うし、可能性が極端に少なかったりすると破られるけど、現状よくわかってないし。」

「なんや？ネタばらしてええん？」

「穩乃から受け取ったものだから、私の力じゃない。というか正確に説明できないの、可能性？もどこまでの可能性かわからない。」

「ほえ、凄いやな。」

「この凄さは普通は理解できない。」